水谷先生とわたし

江口　聡

私が倫理学講座学部生として倫理学に配属された1986年、倫理学講座の指導教官は西谷裕作先生おひとりだった。前任教授であった森口美都男先生は1985年に退官されておられ、また西谷先生もその年の冬から春にかけてご都合が悪く大学に出勤しにくいという状態だったようで、また十数年いすわっておられる助手の先生も我々の面倒を見ることはなく、放っておかれている、という感じであった。人数も学部は各学年3、4人、大学院は各学年1人、という感じでこぢんまりしていた。ただしそのぶん研究室の上下のつながりは緊密であったように思う。まだ先輩方からは森口先生の影響が強く感じられ、先生の教えを受けたかどうかで先輩後輩の間に断層があったかもしれない。ちなみに森口先生のお宅は桝形公也先生に連れられて一度訪問させていただき、その後あの文学部東館の狭くて暗い研究室（中国哲学講座と狭い部屋をさらに縦に二分してつかっていた！）にかかってくる電話で何度もお話させていただくことになり、おそらく私は森口先生と面識がある最後の倫理学研究室生である。

水谷先生と私は10才程度離れているために、新歓や予餞会でお顔を拝見させていただくていどだった。あの研究室で読書会など開いておられたのは知っていたのだが、なにもわからないまま（そして教養部の単位すらないまま）哲学・倫理学の講座に進んだ学部生から見ると、すでに院生やそれ以上の先輩方はもうおそろしいとしか言いようのない存在で、近づくこともできなかったように思う。新歓コン

パで某先輩から「グルントレーグンクはもう読みましたか」と尋ねられておそろしかったのは強烈な思い出である（もちろんそれがなんであるかわからないし、それはいったいなんですか、と聞くこともできない）。最初の夏の合宿は、坂田徳男先生のカントの第三批判に関する論文を読むというもので（それが『判断力批判』を指すということをそのときに知った）、渡されたコピーを読んでもなにが書いてあるのか皆目見当がつかず、レジュメを作成するなどということも無理な話で、直前にドタキャンしてしまったものだ。水谷先生に加え、藤野、北尾、本田、前田、田村各先生……と先輩方の一部の名前をあげれば、学識・人格ともにヘビー級な感じのおそろしさがわかるだろうか。伝統のいわゆる「第二演習」や、（参加していると甲南大学の女子学生と合コンできるという噂を聞き出席した）深谷昭三のシェーラーの演習もなにが議論されているかわからずおそろしかった。そうした記憶は、私にはあの文学部旧館の暗くて乱雑な講義室・演習室の印象と結びついている。

M2 の春に西谷先生がご退職され（ご自宅での退職パーティーが、文人・趣味人としての大学教員という印象として残っている）、後任として大阪市立大から内井惣七先生が赴任された。博識で温厚ではあるが放任主義の西谷先生と比較すると（比較しなくても）内井先生の指導は親身でもあるが厳しく、私自身は目が開かれる思いをしたのだが、それ以前からいらっしゃった先輩方は若干距離をおかれることになったのかもしれない。さらに私があまり将来が明るくない OD になった 1994 年に、科学哲学講座と兼任していた内井先生が科哲の専任となり、同時に加藤尚武先生が教授として赴任されたが、私は依然としてなんとなく研究室まわりでうろうろする毎日を送ることになった。そうしたわけで、私自身は西谷、内井、加藤各先生に主

観的に大きな学恩や人生上の恩義を感じてはいるものの、それぞれ「弟子である」とは主張しにくい立場にある。しかしながら、制度によらないメンターあるいは庇護者としての先達・先輩たちには恵まれたと思う。もちろん水谷先生はその筆頭である。

私が水谷先生とそれなりに親しくお話させていただくようになったのは、博士課程に進学し関西倫理学会（の懇親会）や加茂直樹先生を中心とする京都生命倫理研究会の懇親会に参加させていただけるようになってからである。水谷先生の学会・研究会・および酒の席での議論と談話の手法にはおおいに学ぶところが多くあった。先生の巧みな話術と社交術なしに、研究会でストレートな質問をしまくる男になってしまったために水谷先生自身をはじめ各所から不興を買うことになったが、これはもちろん先生には責任はない。真似をしようと知識もないのに口数を増やそうとした私が悪い。

加藤先生につづいて、1997 年に以前から親しくさせてもらっていた先生が神戸大学から助教授として赴任されたのは私には喜ばしいことだった。1996 年の自分の日記には「水谷先生のコミュニケーション論に出席するといやな顔をされた」などの記述があり、このころから先生との夜のおつきあいが増えていく。先生は従来の御関心から、「パソコン通信」時代からネットでのコミュニケーションに関心をもっておられ（特に阪神淡路大震災が大きなきっかけになったようだ）、私も M2 のころからそうしたコミュニケーションにどっぷりとつかっていたためにそうした話をすることが多かった。ご相談の上、事務には断りなく旧研究室のドアに穴を空けてもらってインターネット回線を通したりしたものだ。黎明期のインターネットを使った各種のふらちな行動の怒られることもしばしばだった。先生の 1998 年からの学振の未来開拓事業の一環である「情報倫理の構築」

（FINE）プロジェクトにリサーチアソシエイトとして参加させていただいたのはまったくありがたいことであった。とにかくそうして先生から怒られながら学んだネットやコンピューターに関する知識を少しは活かせたかもしれない。

FINE プロジェクトについて書くべきであろうことは多いのだが、とにかくプロジェクトメンバーはそうした（我々人文系研究者にとっては）大きな予算のプロジェクトをいかに動かすか、同じ事業に含まれる他のプロジェクトとどういう協力関係をもつか、大学事務部署とどのように協調するか、という点で事前の方法論が不足していたという反省はある。それ以前に加藤先生が「ゲノムプロジェクト」を運用しておられたのだが、もっと大きなプロジェクトの一部という面が強く、また加藤先生のリーダーシップが卓越しすぎていたために、ノウハウが蓄積したとは言いがたいかもしれない。なにより私自身がそうしたプロジェクトで働くという訓練をしておらず、先生には失望させご迷惑をかけたと思う。しかし水谷先生の、しびれをきらさずに合議を重視する運用方法は勉強になった。その後私よりはるかに有能なリサーチアシスタントを擁することによってプロジェクトも順調に終了し、倫理学講座にも大規模・中規模の研究プロジェクトを運用する技術が蓄積されたのではないかと思う。なんにせよ、私もあの時期の先生の年代をはるかに超えて思い出してみれば、若いのにたいへんな仕事をなさったもので心労もたいへんだったろう。私はああしたリーダー役や集団的な活動は向かないようなので諦めている。

2000 年に現在の職場で働かせていただくようになってからは、教育や学生の指導といった仕事に忙殺され、また初めての常勤職ということで有頂天になり、関西倫理学会と同日に行われる本学の学園

祭など出席するために学会をサボるなどしていたところ、先生からお叱りを受けることになった。その後もおりに触れてあれやこれやとお叱りを受け学会活動等に引き戻されることになるのだが、まったくのところ、勤務校で同僚となった加茂直樹先生とならび、これまた「弟子」であるとは主張しにくいのだが、私の人生におけるメンターとして感謝の言葉もない。先生が評価するデリダについて「意味わからん」などと発言して怒られた記憶もあるが、今後ともご指導いただけることを希望している。プライバシーやコミュニケーションの問題について、各哲学者を参照しながらの議論をすることも楽しみにしている。また、先生の教育者あるいはメンターとしての偉大な面は誰もが認めるところだろう。先生の社交性のおかげで、倫理学研究室の伝統である家族的な雰囲気が維持されることになり、おりに触れて催しなどに参加させつづけていただいたのも感謝している。実は先生は文人・教養人として、ヒューム的なエッセイライティングがもっとも得意とするところであると睨んでいるのだが、京大教授や各学会での重責からそうした一面を広く見せることにためらいがあったかもしれない。私としては先生の軽めの哲学・文学・日常エッセイを少しずつ読める日が来ることを願っている。

長年の不摂生が祟ったのか、私は数年前に大きめの病を得て入院する羽目におちいったのだが、なんとその数ヶ月前に先生もまったく同じご病気で同じ経験をされておられ、これまた後輩としてあとを追う形となった。先生からその経験をお聞きして足跡をたどることでさほど不安なく過ごすことができた。これまたまったくありがたいことで、そうしたことは水谷先生以外には相談する先がなかったろう。近年先生はジャズサックスを習いはじめられたそうで、私も伴奏するべく弾けない鍵盤楽器にチャレンジしている。すでに音楽

スタジオで念願のスタジオセッションを楽しませてもらった（スタジオ代はもちろん先生もちである）。酒飲みと音楽で先生との会話を続けられるよう、せいぜい怒られてしまうことを減らしたいものである。

（えぐち さとし　京都女子大学 現代社会学部 教授）